

姫奴淫落

淫らなる晚餐

エクレア編

夜士郎

表紙イラスト：鈴音れな



試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『姫奴淫落 淫らなる晚餐 エクレア編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



姫奴淫落

淫らなる晚餐

エクレア編

夜士郎

表紙 / 鈴音れな

登場人物紹介

Characters

エクレア・ノル・サッシーナ

小国サッシーナの姫。ブロンドの長髪と豊かな肉体の母性的美貌をそなえた、慈愛に満ちた王女。

サーニャ・クレスト・スラルド

サッシーナの隣国、スラルドの王女でエクレアの親友。ロリ体型の子どもっぽい性格の姫君。

冷たく、暗い牢獄に二人の少女が幽閉されていた。

骨身の軋むような冷気が積み上げた石の隙間から忍び寄る。

すえた汚物の匂いが鼻をつく。どこからか呻き声が聞こえてくる。

「寒くない？」

冷えきった石床に腰を下ろし——エクレア・ノル・サツシーナは、懷中に抱いた少女へ問いかけた。少女はコクと頷いて、エクレアの胸元へ猫のように顔を寄せてくる。

怯えて、震える小さなカラダ。

エクレアは安心させるように、その頭を撫でてあげる。

「くひひ……まったく、イイ身体をしてるよなあ、オイ？」

柵の向こうから投げかけられる粗野な声に、腕の中の少女がビクと震え上がった。

「お黙りなさい」と、エクレアは、舌なめずりをするような看守を睨みつけた。

けれど彼は、まるでなめくじの這うようなねっとりとした視線をこちらへ向けるばかりだ。

エクレアは——サツシーナ国の姫君はそれに恥じるように顔を背ける。

サツシーナ。小さな宗教国家である。神を信仰し、民を愛し、穏やかに暮らしてきた一族である。姫君であるエクレアもまた、神を信仰し人々に慈愛を注いできた。

だがその国もいまはもうない。

何もかも、踏み潰された。

突如として現れたのは、悪鬼がごとき黒馬の群れ。戦う術などもたないサッシーナの民は、殺され尽くし、犯され尽くした。

神に助けを乞おうとも、救いの手は差し伸べられることもなく――。

パノルゴスの軍勢は、サッシーナを侵略したのだった。

パノルゴス。圧倒的な軍事力を用いて国を滅ぼし領土を広げてゆく軍事大国である。

男は■■■■にいたるまで皆殺し、女は■■■■にいたるまで犯し尽くす野蛮な国だ。

そんな国に、エクレアは囚われていた。

人々に、聖女と呼ばれ称えられた、美しきエクレア・ノル・サッシーナ。

涼やかな眉、優しげに垂れた瞳、母性に溢れるその面貌。そしてなによりも、豊潤極まりないその肉体が男の目を惹きつけてやまぬ少女である。

胸元を膨らませる乳房は目を見張るほどに大きく柔らかさうだ。腕に抱く少女の頭蓋に乗っかって、ぐにゆりと形を歪ませている柔肉の様が淫猥であった。

床に潰された尻肉もまた豊かに育って、脂身が溢れてきそうだ。それでいて彼女の体躯にびったりと張りついた純白のドレスの、その腰まわりは折れそうなくらいにくびれている。甘く香るのは長年身体に染みこませてきた香水だろうか。

優しげで慈愛に満ちた清純な美貌と対照的に、肉体は娼婦さながらである。そのコント

ラストがまた、オスの欲望を刺激してしまうのだ。

ごくりと、看守の喉が鳴る。

まるで、男に媚びるために生まれてきたようなエクレアの体つきであった。その身体に小さなサーニヤの身体はすっぽりとはまりこんでいる。

「……ねえ、エクレア」

怯えきつた声音が、乳房を震わせる。

サーニヤ・クレスト・スラルド。

サツシーナの隣国、スラルドの姫君で——エクレアの大事な友達だ。

頭の左右で二つに束ねた桃色の髪はウサギの耳のよう。小さな、いまだ成長途上の
を思わせる肢体は、寒さを耐えるように、震え続けていた。

「……私たちは。これから……どうなるの」

パノルゴスの牢獄に囚われて、もう何日になるか。

「……」

エクレアの国も、サーニヤの国も、攻め込まれ、為す術なく滅ぼされ。

囚われの姫君二人は押し寄せる不安と絶望に、ただ身を寄せ合うしかない。けれどエクレアは両手を組み、空を見上げて。

「大丈夫、大丈夫ですよ、サーニヤ。神は決して、私たちを見捨てません」

濃密な男の匂いが脳を侵す。思考がふやけてゆくようだ。

左右にぐうっと引き伸ばされた、乳肉の無惨も気にならなくなる。肉の塊を少女は自ら握りしめていた。

指先の一本一本に絡む雄液が絡みつく。滑りよくぬちぬちゆしごきあげる。しっとりとしてスベスベな姫指が男根粘膜を通過すると、男の腰がヒクヒク震えた。興奮するペニスと比べてほんのわずかに冷えた指の感触は鮮烈である。

「おお……おお」「おぐうう」「んふうっ……」「うおおお……」

耳朶に響く快楽の呻きが、聖女としての少女を行為に没頭させてゆく。

——残った一人が、目の前に立つ。

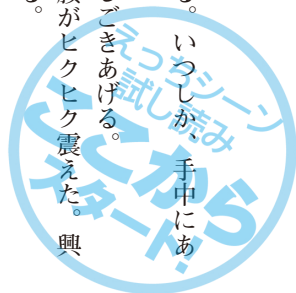
顔の前に突きつけられる雄々しい肉の棒。先端からトロトロと、腐汁を垂れ流すのは変わらない。それをずいと、説法を問いた貞淑な唇に押しつけられた。

桃色の唇が、腐肉に潰され形を歪める。

「い、いやあ……そんなの、口につけないで……。き、汚い……わ」

口では反抗するも、少女の頭蓋は逃げようとしなない。目に見えないなにかに固定されてしまったような、姫君の口壺へ向けて護姫の兵士は肉棒を突き出すのだ。

唇を割られ「ムグウッ！」顎を上下に開かれて「オゴオッ！」それは可憐なる少女の口壺を埋め尽くしてしまう。



「あ……あんグウ……ッ!? ふ、フグウ……ッ」

押し寄せる圧迫感に涙が溢れて、苦しげに振るう腰は扇情的だ。膿汁の分泌は止まらずに、少女の喉奥へぶちゅぶちゅと流れ込んでくる。

（ああ……。お、オシッコをするものを、口の中に入れてしまった……）

脳髓まで染みこむような、凄まじい雄の味に「オゲエツ」とたまらずえなくも、兵士は冷酷に肉根を押しつけてくるばかりである。

「——どうですか、姫様。部下のおチンポは美味しいですか？」

（……そんな、わけないっ……こんな……お、おチンポ？ なんておいしいわけっ……）
皮肉げな男の声に反抗心が戻るも、むうむうと呻く少女の姿はただ滑稽だ。

「んんっ……んぐうう……ん、ぶちゆるっ……」

呼吸が苦しくて、どうにか気道を確保しようと頭蓋を動かす。亀頭が上顎を擦り、頬の内側をズリと撫でて、すると兵士はうぐおと息を荒らげて快感を示すのだ。

（くる、し……は、はやく、鎮めないと……っ）

おそろおそるとエクレアは、口腔を犯す肉塊に舌を押し当てた。その瞬間——兵士の腰が、ピクンッ！ と跳ね上がって上顎へ鈴口がぐちゅりと追突した。

「ンゲウツ!？」

びっくりと目を見開く姫君をよそに、兵士は腰を揺り動かす。それに促されてエクレア

は、おそろのおそろと肉棒を舐め始める。まるで幼童がキャンディーを舐めるかのような、拙い舌の蠕動が、いきり立つ肉棒を優しく舐め溶かしてゆく。

「んっ……ちゅ、ちゅぱっ……ん、ちゅ、ちゅるっ……」

涙に濡れた瞳を上目遣いに金糸をゆらゆらと揺らして少女はおどまじき肉根へ舌を這わす。清廉なる美貌に汚らしい陰茎が突っこまれている様はあまりにも淫猥だ。

「あらら、美味しそうにチンポを舐めてるわあ」

「五本も悦ばせているわ。まったくいやらしい身体よね」

「まるで男の性欲処理のための身体みたい。便器よ、男の便器なのよ」
聞こえてくる声——ことに同性から投げかけられる侮蔑は心に響く。

否定したくとも口はふさがれてそれを成せない。また少女の瞳に涙が溢れ出して、その哀しげな様子はいつそうに貴族たちの嗜虐心を刺激するのだ。

演台の上で、男の肉便器と化した聖女に注がれる、嘲笑の瞳が熱を増す。

（ああ……わたしをそんな目で見ないで……そんな、ふしだらなものを見るような……）

手中の、乳房に触れる、口中の男根が軋むのを感じる。柔らかな乙女に愛撫されて、毒物に侵された神官兵たちは、己が護るべき少女へと小便を垂れ流す器官を突き立てて気も狂わんばかりの悦楽に呻き、腰を震わせる。

「じゅばっ……ぐちゅるっ！ ……ふっ、じゅるちゅ、くちゅるっ……ッ」

逞しい肉韃の裏側に舌を這わせる。舌から上へなぞり、亀頭にいたる段差を舌の先つばでちゅぷぷと擦りあげる。なにかざらりとして生臭い固形物が舌先に乗っかって、それは唾液に溶けて姫君の喉奥へと流れ落ちてゆくのである。

「じゅっ……じゅるう。んっ、んんっ！ あふっ、ああ、手が、んぐうっ！」

ぐちゅぐちゅっ、ぐちゅぐちゅっ！ 指紋を消そうかというほどに、手中の肉根がズリと前後に出し入れされて手の平が熱くなる。中指と人差し指の間からズコズコ突き出す亀頭、傘が指の狭間で捲れ戻って、兵士はおお、おおと断続的に呻きをあげる。

（わたしの手……手が、おチンポでいっぱい……ああ、熱くて、硬くて……ヤケドしそうっ……）

聖書を持ち、孤児に料理を拵えて、人々の手を取った。

神に仕える姫君の美手は、けれど今や男を悦ばせる自慰器具のようである。我慢汁まみれの指先はうねうねとものがき、それがなおさらに兵士たちへ快樂を与える。

（それに、お、おっぱいもおおっ……）

桃色に染まった肉塊は男根をしごき立てる肉布団と化して元の形に戻るのかどうかさえ定かではない。脂肪を絞り出すようにぐちゅりぐちゅりと抽送して押し潰されて、乳頭が陰茎に抉られると、胸の奥がえもいわれる痺れに襲われて顎が震えるのだ。

（わたしの、胸……あんなに、むちゃくちゃに、パンの生地みたいになされてしまってる……）

壊れちゃう、ああ、潰れて元の形に戻らなくなってしまうっ……)

そんな恐怖がちくりちくりと胸を刺すのに。

(でも、みんな気持ちよさそう……。それにサーニャも、これで護れるのだからっ)
湧き上がるのは、彼らに対する献身の悦であった。

手の平に、乳房に伝わる生々しい触感、気持ちのよさそうな彼らの様子が、エクレアの心を悦ばせてしまう。私がみんなの救いとなるから、だから私を好きにして。聖女として刷り込まれた自己犠牲愛が——皮肉にも、少女に現状を肯定させてゆく。

「んぐっ……んじゅぶっ……！ ふはっ、んっ、ちゆるるるるっ……」

汗の染みこんだドレスが尻肉にぴったりと張りついている。果実が甘汁を垂れ流すかのときその豊臀を艶めかしく揺さぶって、美姫は口腔を埋める肉棒に甘い愛撫を繰り返す。愛顔を左右に揺らして亀頭を内頬に撫でつける。そうしながら鈴口から漏れる肉汁をちゅぱちゅぱと舐め取ると、陰茎は面白いくらいに戦おのいて快美を知らせてくれるのだ。

ぶじゆるぐじゆるっ、ぬぼっ、ぬぼっ！ ずぶずぶ、じゆるぶっ！

聖女の口は——身体はもはや淫らな楽器と化して、周囲に卑猥な粘着音を響かせる。

「ははは。まさしく、男のための神官だ」

「サッシーナの神は淫神かあ？」

「うわあ、娼婦でもあれほどに奉仕はしないぜ」

「ふむぐっ……むぐふっ、じゅりゅっ……！ ふぐっ、んんんんふっ、ンフウウッ！」

貴族たちの嘲笑も、遠い潮騒のようである。朦朧とする意識の中で、彼女を支配するのはただ、苦しそうな彼らを救ってあげたいという献身のみ。

——それなのに、身体の奥が熱い。

「じゅっ、じゅっ、じゅるちゅっ！ はふっ、ふうううっ、ぬちゆるぐちゆるっ！」

まん丸と開いた唇からどろどろと涎が垂れ落ちる。眉根は蕩け、惚けた瞳は肉根のみを映し出す。清楚、清廉であった、護るべき姫君の淫らな有様に、理性を失った神官兵たちも興奮の極みに達したのだろう。

「オオッ！」「オグウッ！」と両手の男が呻き声をあげて。

どびゆるるるっ！ どびゅ！ と、手中の肉が炸裂したのである。

（ひ、な、なにつ!! なにか、出てるうううっ!）

手中が焦がされる感覚にエクレアは戦いた。指の狭間より噴出する白濁が、金髪にまでどびゅどびゅと飛び散ってくる。

（あ、熱い、熱くてっ……なに、これっ、きやああああっ!）

肉の破裂は終わらない。次いで胸肉にくるまれたソーセイジからも、大量の熱塊がぶちまけられるのである。まるで熱湯を注がれるような感覚に少女の芯が痙攣する。

びゆるるっ！ びゅっ、びゅばあっ！

どくん、どくんと高まる鼓動が痛いほどに脳を揺さぶってくる。

子宮が煮えている。

理性が啼いている。

おかしくなる。なにか、自分が自分でなくなってしまうような、暗い予感がある——！
「おね、がいつ……なんでも、ほかはなんでもします、からっ……ああ、これは、これはだめえっ……んぐぐっ！ あっ、ああっ、ひああああっ」

必死の懇願を聞き入れず、ジェミニは腰を揺する。くつろげられていく秘肉、鬘という鬘が男鞆に擦られ、揉まれて、聖女は豊満な肢体を艶めかしくくねらせた。

「なに、なんなのですかっ、これはっ……！」

得体の知れないモノが背骨を這い上がる。うなじを震わせ、頭蓋に至り——脳内に甘いなにかを流し込んでくる。たまらない高揚感。

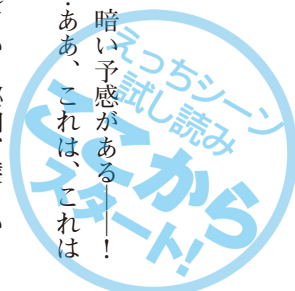
子を成すための儀式なのに、総身に満ちてゆく快悦の衝動。

ああこれは、神に仕えるものが感じてはならないものだ——。

「クク。ああ、罪深き女神よ、あなたは感じているのですよ。——淫欲を。快楽を」

「そ、そんなっ……そんな、ことっ」

肉欲。淫欲。それに耽るもの、神の裁きを受けると——戒律にて厳しく戒められている、人の欲求が一つである。湧き上がる背徳感に、涙が滲む。



「わっ……私は、そんな、ああ、どうしてこんなにつ……んぐうつつ！」

「それは毒のせいですよ、姫様。だから、感じるのはしょうがないのです」

——しょうがない。カラダが、理性を犯す毒に汚染されているのだから。

「ど……く、毒のっ……ああ、わたひのおま○こ、どくにおかしやれてるっ……ッ。だから、こんなにおま○こ……あつくて、ひゃんっ、かんじてしまうのっ……？ うっ」
 ぶんぶんと頭を振って、襲い来る肉悦を振り払おうとする。けれど肉根にて粘膜を抉りあげられると、「くひいーっ」とあられもない悲鳴とともに、双乳をいやらしく揺さぶって身悶えてしまうのだ。

「うわあ、初めてでもうあんなに感じてるわ。淫らな女ねえ」

(ちっ……違おう、これは、どく、毒のせいなのおっ……)

流す涙は哀しみかあるいは悦楽によるものか。潤む瞳は蠱惑を帯びて、少女の美貌は男を狂わす雌のそれへと変貌してゆく。吐息は熱く、甘く、眦は溶けて、熱を持つ身体はへばりつく精臭を周囲へと濃く発散させる。

「んぐうっ、……らめ、なか、わたひのなかそんなにこすらないでっ……」

汗ばむ肉付きのよい太股が色っぽく輝いて、男の腰の上で蠢く。イヤイヤ、イヤイヤと、駄々っ子のように首を振って悦を振り払う、少女の砲乳がぶるぶると左右に揺れ躍る。

「——受け入れなさい。聖女よ。これも、試練なのです」

いっそ優しげに、ジェミニはそう言った。

「……し、試練……?」

「そう。この快樂を受け入れてなお淫樂に耽ることがなければ——あなたはよりいっそうちに、神から愛されることでしょう」

「試練、試練……? ああ、神よ、わたしはっ……」

男の言葉はひどく甘美に耳に響いた。

ああ——そうだ。

試練。試練なのだ。毒に侵され理性の維持もままならない状態で、刹那も信仰を失わない。これは、淫欲の罪を克服するための試練なのだ。否定してはいけない。受け入れて、その上で堪え忍ばなければならない。苦行とはそういうものであるがゆえに。

だから感じてよいのだ。いや、感じなければならぬのだ——。

「それでは行きますよ姫様。男のチンポを、存分に感じてください」

にいと嗤う男の赤黒肉が、ピンク色の粘膜を押し潰し、ドーナツ状の子宮口をぐりりと抉りあげる。

「ふあああつ、ああつ！ あああーっ！ お、おちんぼっ……!」

頭蓋を突き抜ける衝撃、心中に溢れるのは紛れもない歓喜であった。

「おま〇こがあつ……おちんぼで、ああ、ぐちゃあつて、んんひいーっ」

そのとき少女の内に現れた反応を、彼女自身は知る由もない。男のそれを受け入れた肉壺が、うねり、震え、愛するもののように肉鞘を抱きしめたのだ。ジェミニが「おおつ」と呻きを漏らして腰を浮かせる。それに突き上げられてエクレアは総身をくねらせた。

「あふううあつ、あひいいあつ！ ふあ、おま〇こお、おま〇こおつ……」

首が震え金髪が舞う。ムチリと腫れた太股が緩み開いてなお男を深くへと受け入れる。

「くつ……おお、なんともつ……これは。たいした名器だつ……」

処女のキツさを維持しながらも、肉根を包み込む粘膜はうねり、蠢き、海綿体を愛撫してくる。たつぷりの愛液を絡ませながら、粘膜にて擦りあげてくる。まるで聖女の挺身そのものが、ペニスに与えられているかのようだ。

女を相手に百戦錬磨のジェミニをして苦しげに呻かせるエクレアの性器であった。

「これは、負けていられません……なっ！」

彼は細腰を掴むとぐぶぐぶと肉根を出し入れする。張り出した亀頭が内部を削りあげ、さらに角度をつけて尿道のほうを擦りあげると――。

「……ッ！ くひいいいい——ッ！ しよ、しよこらめええええ——ッ！」

凄まじい肉悦に顎を蹴り上げられ、聖女はたまらない悲鳴を放つてしまう。

「このあたりですか、弱いのは。ほれほれ、もつと責めてあげましょう」

「しよこつ、おま〇こ、おかひくなりのれすううう、くひーっ」

凶悪なる肉槍に敏感な弱点をぐりぐりと抉られてお臍まで衝撃が響く。抉られるたびに頭の中がどろどろとろけていく。腹腔が燃えて吐息は鞆のように荒い。脂身たつぷりの尻肉が快美に震えて尻孔がクパクパと開閉を繰り返す。

ぶちゆる、ぐちゆると肉音が響く。男の陰毛は姫君の肉液まみれである。

「ああつ、あつ、いひつ、こんな、こんなやつ、だめ、だめええ……！」
初めてだった。

こんな、これほどの快感は。

肉の刺激、それは甘くとろける蜜の味。これまで、清くあろうとした人生の全てがどこかへ吹き飛ばされてゆく。なんのために生きてきたのか。ただ戒律を守り、これほどの快感を知らずして、一体なんのために——。

（いけないっ……こんなこと、考えちゃ、いけないのにつ、わたしは、神をつ……）

下腹がぐうと持ち上がり、肋骨が浮き上がる。甘汗まみれの全身は紅潮しきり、少女は喉を震わせる。いつしか己で尻を揺り動かしていることに、彼女は気づいているだろうか。

「気持ちいいでしょう、エクレア？ 男のチンポの味は」

「ひい、しよんな、しよんなことつありまへっ……ああ、ひゅぐうう——っ！」

——気持ちいい。

彼の逞しいチンポが、一番奥をつぶりと押し上げて。

「……あひいつ、ああ、はっひつ……しよ、しよこおおつ……」

「気持ちよければ……そう言ってしまうなさい。楽になるかもしれないませんよ」
 優しい声。しかして彼の腰は激しくエクレアの内部を蹂躪する。押し込むときは弱い
 スポットを擦りながら貫いて、そうして張り出した傘で肉襷を引っ掻きながら引いていく。
 抽送を繰り返されるたびに理性が溶けて、少女は眼球を裏返し。

「いいつ……いいつ！　ああ、おま○こきもひいいいのおおつ——つ！」
 観衆に聞こえるほどの声で、そう叫んでいた。

どよめき、嘲笑、侮蔑——。

「まあ、なんと」「浅ましい」「あれで神官ですって」「なんと淫らな」

（ああ……聞こえる。こんなはしたない私を見る、みんなの声が……）

湧き上がる羞恥に、けれど快楽は増してゆく。人々に女神と称えられ褒めそやされた己
 が、男のチンポをハメて悦んでいるのだ。そんな姿を馬鹿にされているのだ。

これまでの己が溶けてゆく。強く念じ抱こうとする信心も粘膜を抉られて「あへえつ」
 と散ってゆく。ぐちゆり、ぐちゆり、体内に響く淫音が全てを掻き消してゆく。
 「ほら、膝を立てて。もつと自分から動きやすいように……そうそう」

言われるがまま、ガニ股の下品な恰好をとっていた。ああ、確かに、これなら腰を前後
 左右に振りやすい。アソコをずっぶり貫く肉棒を愉しめる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>